

「症例報告」を書くコツ(1)

医師国家試験でいわゆる「教科書的」なことを学んだ旬な君たちが、「これなんだろう?」と感じる症例は、勉強不足か‘珍しい’症例です。

地域医療では、大学病院では味わえない、**診断から治療まで**一貫して勉強する機会が多くあります。一人一人の患者さんを丁寧に診ながら、**検査データや画像を常に整理**しておこう。

29年前、私が新潟県南魚沼で経験させてもらった患者さんを例に挙げて「**症例報告**」を書くコツを伝授します。

**コツ1:症例は常に学会や研究会、また看護師さん
とのミーティングで発表する
つもりでまとめておく**

**食道・胃接合部に発生した
食道パピローマの1例**

**小林英司1)、本間正一郎1)
植木淳一2)、桑原 恒3)**

- 1)新潟県立六日町病院外科
- 2)新潟大学第三内科
- 3)桑原医院

1988年(昭和63年)の症例

当時まとめた資料

症 例：78歳，女性

主 訴：胸骨後部狭窄感

既往歴：亀背。

現病歴 昭和63年3月上記症状時々出現するため，近医受診。上部消化管造影にて異常影指摘され，当科紹介される。

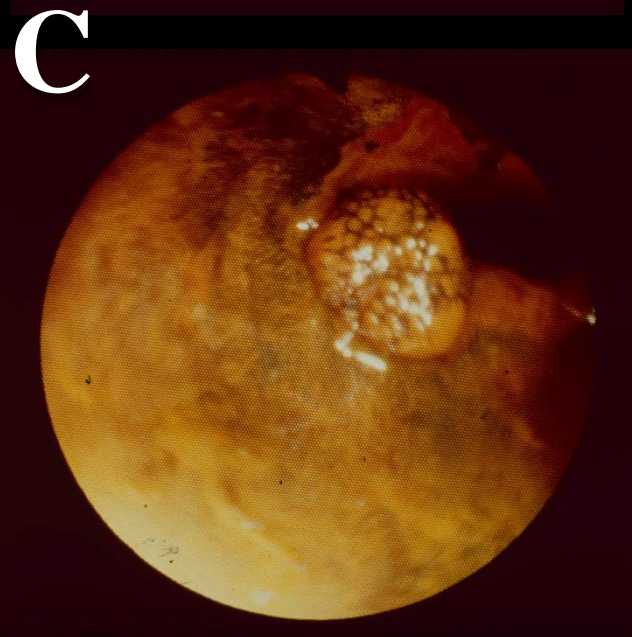
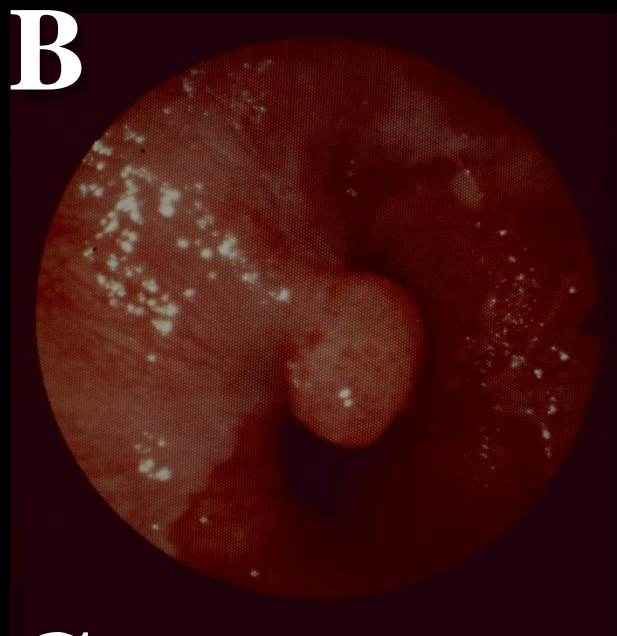
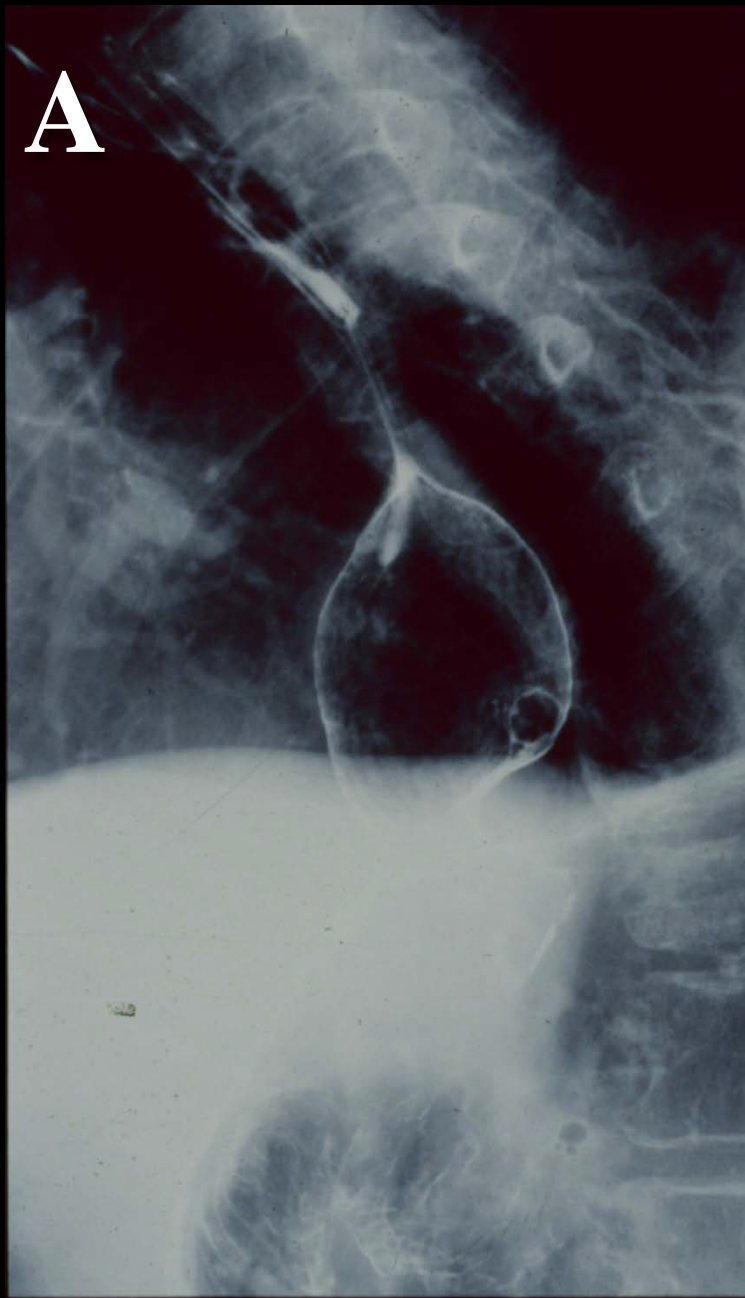
受診時所見：

亀背強く，時々胸やけを訴える。

血液検査所見：

RBC 411	LDH 376	BUN 19.3
Hgb 12.9	GOT 12	Cre 0.7
Hct 38.3	GPT 3	CEA 2.8
WBC 3200	ALP 129	

懐かしの
“ブルースライド”

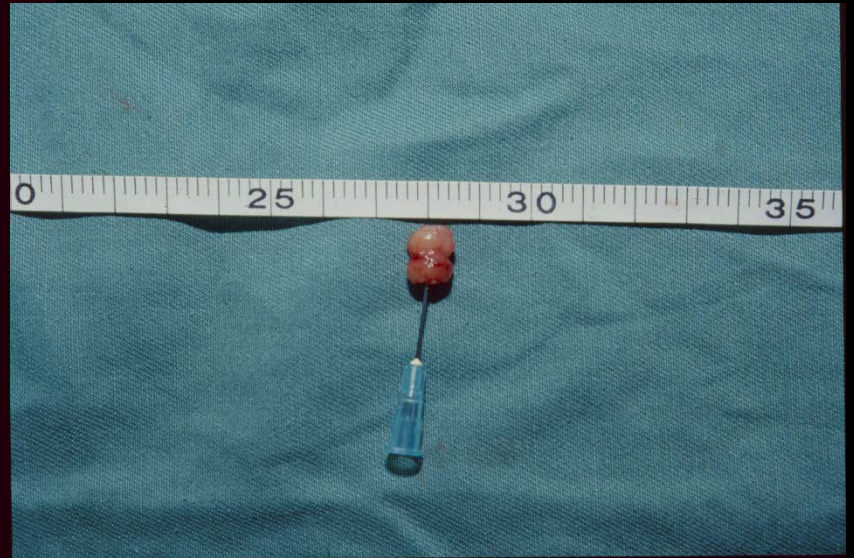


A

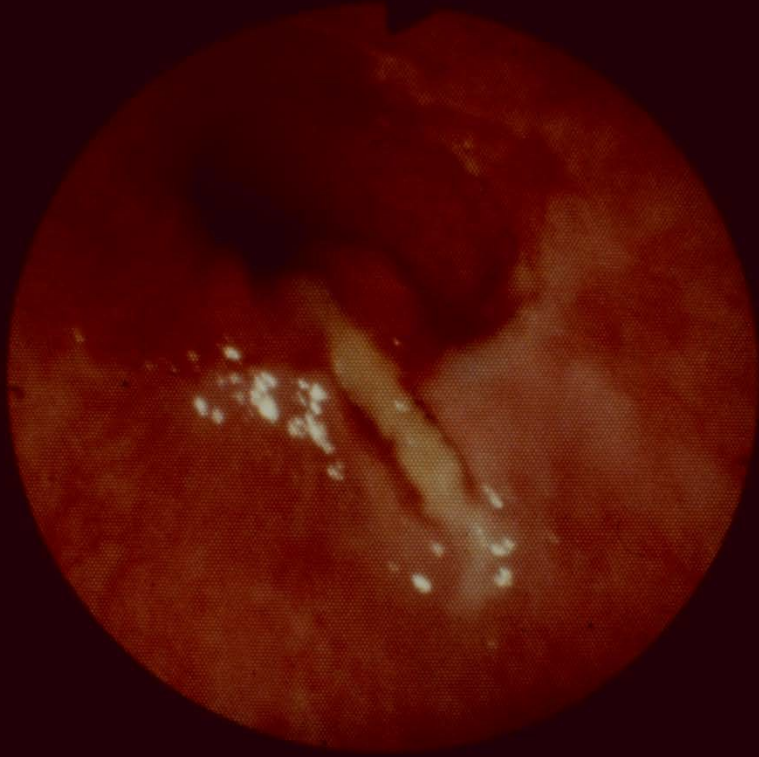


8 7 0 4 0 9

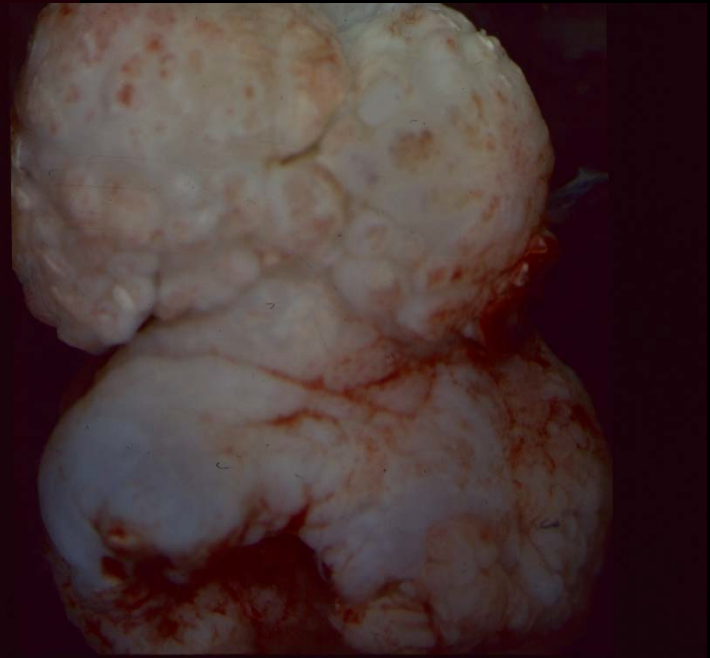
B



A



B



コツ2:小さな研究会でもいいので発表する

302

ENDOSCOPIC FORUM for digestive disease Vol.4 No.2, 1988

食道扁平上皮乳頭腫の3例

加藤俊幸*¹・斎藤征史*¹・丹羽正之*¹・後藤俊夫*¹・
吉岡秀樹*¹・小越和栄*¹・鈴木正武*²

**先輩(自治4期)
が教えてくれた**

要旨：食道扁平上皮乳頭腫は稀な疾患であるが、この2年間にわれわれはポリペクトミーおよび生検によって3例を確診した。症例1は65歳男性、主訴は心窩部痛と吐気。内視鏡検査で下部食道後壁に表面凹凸を伴う山田Ⅲ型隆起を認め、ポリペクトミーを施行した。7×7×5mmの桑の実状に分葉した腫瘍で、組織学的には乳頭状増殖を伴う扁平上皮細胞の増生を認め、扁平上皮乳頭腫と診断した。症例2は40歳男性、主訴は吐気。下部食道にやや白色の山田Ⅱ型隆起を認め、生検で扁平上皮乳頭腫と診断された。症例3は54歳女性、主訴は心窩部不快感。中部食道に表面平滑な白色調の山田Ⅰ型隆起を認め、ルゴール染色では淡く染まった。生検で剔除され扁平上皮乳頭腫であった。以上3例の食道乳頭腫について報告した。

Key words：食道乳頭腫，食道良性腫瘍，ポリペクトミー，squamous cell papilloma

[ENDOSCOPIC FORUM for digestive disease Vol.4 No.2, pp. 302-305, 1988]

性¹²⁾も注目されている。しかし、実験的には、ラットでニトロ化合物の投与により leukoplakia かつ

コツ3: 他の論文を調べる

11 か月間に増大傾向を認めた例¹⁰⁾などが報告されている。これらのことから、食道の乳頭腫も HPV 感染の問題とともに悪性化への懸念が強まっている。

したがって治療方針としては、生検診断後に可能であれば内視鏡的ポリペクトミーを施行すべきである。最近ではレーザー照射を行った報告⁹⁾もみられるが、ポリペクトミー不可能な隆起では自然消失⁹⁾もみられるので、生検と共に定期的な経過観察を行えばよいと考えられる。

IV. 結 論

われわれが経験した食道乳頭腫 3 例について報告した。注意深い観察と積極的な生検が大切で、3 例とも生検にて診断し、1 例はポリペクトミーを施行し得た。

(本論文の要旨は第 24 回日本消化器内視鏡学会 甲信越地方会において発表した。)

文 献

- 1) Plachta A: Benign tumor of the esophagus, Review of literature and report of 99 cases. *Am. J. Gastroenterol.* 38: 639-652, 1962.
- 2) Suzuki H, Nagayo T: Primary tumors of the esophagus other than squamous cell carcinoma, histologic classification and statistics in the surgical and autopsied materials in Japan. *Adv. Surg. Oncol.* 3: 73-109, 1980.
- 3) 有村明彦, 吉田茂明, 山口 肇, 田尻久雄, 斎藤大三, 土方 淳, 吉村 宏, 林田康明, 荻原 泰, 中村 誠, 吉森正喜, 小黒八七郎, 板橋正幸, 広田映五: 食道乳頭腫の内視鏡的臨床病理学的検討. *Progress of Digestive Endoscopy* 27: 88-91, 1985.
- 4) 桑野常文, 飯田三雄, 洲上忠彦, 岩下明徳, 黒岩重和, 藤島正敏: 食道乳頭腫 19 例の臨床像. *Gastro-*

enterological Endoscopy 30: 513-518, 1988.

- 5) 西川睦彦, 星島親夫, 稲田 裕, 五明田学: 皮膚, 口腔, 咽頭及び食道粘膜に著明な乳頭腫瘍を合併した胃癌の 1 例. *日消病誌* 73: 457, 1976.
- 6) 三戸岡英樹, 小野山雄作, 友藤喜信, 安田 勤, 佐伯 進, 馬場茂明, 熊谷正彦, 水野保夫, 佐藤昌史: 食道 papillomatosis を来した悪性黒色表皮腫の 1 例. *Gastroenterological Endoscopy* 26: 2486, 1984.
- 7) 永井規規, 大橋東二郎, 渡辺英伸: 上皮内癌(ep 癌)を伴った多発性食道乳頭腫の 1 例. *Progress of Digestive Endoscopy* 28: 226-228, 1986.
- 8) 河島祥彦, 北尾優子, 奥野裕康, 渡辺敏彦, 松本利彦, 野中恒幸, 奥平 勝, 久保田佳嗣, 立岩二郎, 平松 新, 水野孝子, 鮫島美子: 食道扁平上皮乳頭腫の 3 例. *Gastroenterological Endoscopy* 28: 1272-1280, 1986.
- 9) 西村滋生, 吉田智治, 伊藤忠彦, 荻田幹夫, 安武隆二郎, 大谷達夫, 多田正弘, 相部 剛, 宮崎誠司, 河原清博, 平田牧三, 沖田 極, 岡崎幸紀, 竹本忠良: 食道乳頭腫の 2 例—超音波内視鏡検査および電子スコープ検査による検討を加えて—. *Gastroenterological Endoscopy* 28: 2327-2334, 1986.
- 10) 小杉廣志, 荒井泰道, 松本純一, 矢作和也, 佐伯俊一, 齋部光一, 下桑 宏, 近藤忠徳: 経過観察中増大傾向を示した食道乳頭腫の 1 例. *Progress of Digestive Endoscopy* 30: 207-210, 1987.
- 11) 佐々木宏之, 亀本 茂, 杉本登司夫: 異型細胞を認め切除した食道乳頭腫の 1 例. *Gastroenterol. Endosc.* 22: 1816, 1980.
- 12) Colina F, Solis JA, Munoz MT: squamous papilloma of the esophagus. *Am. J. Gastroenterol.* 74: 410-414, 1980.
- 13) Syrjänen K, Pyrhönen S, Aukee S, Koskella E: Squamous cell papilloma of the esophagus; A tumor probably caused by Human Papilloma Virus (HPV). *Diagnostic Histopathology* 5: 291-296, 1982.
- 14) Napolkov NP, Pozhariski KM: Morphogenesis of tumors of the esophagus. *J. Natl. Cancer Inst.* 42: 927-940, 1969.
- 15) Nakamura T: Tumors of the esophagus and duodenum in duced in mice by oral administration of N-ethyl-N-nitro-N-nitrosoguanidine. *J. Natl. Cancer Inst.* 52: 519, 1974.
- 16) Hille JJ, Markowitz S, Margolius KA, Isaacson C: Human papilloma virus and carcinoma of the esophagus. *N. Eng. J. Med.* 312: 1707, 1985.

当時は論文
からの孫引き

昔は‘孫引き’

症 例

内視鏡的ポリペクトミーを施行した 中部食道乳頭腫の1例

山田俊彦	村上正巳	今 陽一	大嶋 寛
小暮道夫	長嶺竹明	功刀正吏	西岡利夫
山田昇司	樋口次男	関口利和	小林節雄

はじめに

食道の良性腫瘍は近年その報告が増えているものの、悪性腫瘍に比べてまれな疾患である上、その多くが平滑筋腫やポリープなどで、乳頭腫は極めてまれである。筆者らが文献的に検索しえたものは、海外の文献を含めても約40例で、このうち中部食道に単発的にみられたものは8例と少ない。

今回われわれは、内視鏡的ポリペクトミーにより確定診断、および治療しえた食道乳頭腫の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

病的反射を認めず。振動覚は両下肢でやや低下。

入院時検査成績(**Table 1**)：検尿では尿蛋白(±)以外正常。便潜血反応陰性。血算、肝機能、血清電解質などに異常を認めず。血清鉄やや低下。RAテスト強陽性。各種腫瘍マーカー陰性。ツ反強陽性。胸部X線検査で右肺S₆に陳旧性肺結核の所見あり。心電図で上室性期外収縮を認めた。経口的75g糖負荷試験で糖尿病型を呈した。

上部消化管X線検査：昭和58年3月1日に行なった検査では、中部食道後壁に辺縁やや不整の卵型隆起性病変を認めた(**Fig. 1**)。境界は明瞭で、

当時のキーワードは‘ポリペクトミー’

症 例

ポリペクトミーを施行しえた食道パピローマの1例

岡田淳一¹⁾ 神津照雄²⁾ 山崎 義和 円山正博
村島正泰 今野秀次 小野田昌一 磯野可一
近藤良晴³⁾ 植松貞夫¹⁾

はじめに

食道パピローマは食道良性上皮性腫瘍の1型とされ、扁平上皮に被われ、乳頭部の延長を伴った隆起性病変と定義されている¹⁾。われわれが検索した食道パピローマの報告は、欧米文献を含めて59例と少なく、珍しい疾患といえる。今回ポリペクトミーを施行しえた食道パピローマの1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

奥の分葉状隆起により構成されていた。また裂孔ヘルニアの合併が疑われた。ポリペクトミーを行い、摘出した標本は10×5×5 mmの腫瘍であった。その後合併症なく順調に経過し、ポリペクトミーから2カ月後の内視鏡検査でも再発は認めていない。

病理組織学的所見：Fig. 2が摘出標本のHE染色ルーペ像である。長軸にそった切片で、左が表面平滑、右が分葉状の領域である。右下にポリペ

‘100例以下’だ！！

食道乳頭腫の内視鏡的，臨床病理学的検討

有村明彦 ¹⁾	吉田茂明	山口 肇	田尻 久雄
齊藤大三	土方 淳	吉村 宏	林田 康明
荻原 泰	中村 誠	吉森正喜	小黒八七郎
板橋正幸 ²⁾	廣田映五		

はじめに

食道疾患において良性上皮性腫瘍はまれであるが、比較的良好に知られているものとしては食道乳頭腫があげられる。今回われわれは当院にて最近6年間に得られた食道乳頭腫16例の内視鏡像，臨床病理像，組織像を検討したところ，その鑑別疾患や食道癌との関連性などについて興味ある知見を得たので，文献的考察を加えて報告したい。

もの。Type IIは山田3型ないし4型の立ち上がりを示し，表面の性状はType Iと同様に，光沢を有する白色調を示すもの。Type IIIは山田3型ないし4型の立ち上がりを示し，表面が発赤調を示すもの。Type IVは山田3型の立ち上がりをもつ比較的大型な扁平隆起像を示し，表面が顆粒状，多結節状を示すものである。

Color 1はType I，Type II，Type IIIの，またColor 2はType IVの典型的内視鏡を示したも

コツ4:今はICTを使え!

インターネットに「**食道扁平上皮乳頭腫**」と入れると!!

- [食道乳頭腫の内視鏡的および臨床病理学的検討](#)
- https://www.jstage.jst.go.jp/article/pde/67/2/67_26/...
- 2016/12/31・いわゆる食道乳頭腫は過形成性の扁平上皮が乳頭状増殖を示す腫瘍類似病変であり、真の腫瘍は稀とされている。近年その報告例は増加しており、自験例について内視鏡的および病理組織学的に検討し、食道乳頭腫の臨床的 ...
- [食道の良性腫瘍\(しょくどうのりょうせいしゅよう\)の原因...](#)
- www.sickness-online.com/digestive10.html
- 上皮性のもものでは乳頭腫が多く、上皮以外においては平滑筋腫や血管腫、脂肪腫、嚢腫、顆粒(かりゅう)細胞腫、リンパ管腫、線維腫などがあります。食道の平滑筋にできる平滑筋腫が半数をしめ30~60歳に、比較的によくみられます。...
- [食道扁平乳頭腫の臨床病理学的・免疫組織化学的検索: 胃と ...](#)
- medicalfinder.jp/doi/abs/10.11477/mf.1403101290
- 食道扁平乳頭腫151症例, 156病変を対象として臨床病理学的および免疫組織化学的立場から検討した。平均年齢は60.5歳, 男女比は1:1.4でやや女性に多く, 中部食道に好発した(51.9%)。形態学的に外方へ向かって増殖するexophytic type ...

食道乳頭腫の内視鏡的および臨床病理学的検討

U塚 希	坂 亮一	積山奈穂子	藤田英資子
順子	竹内英津子	石川尚之	荻原正示
一谷まり子	新見品子	前田 淳	重本六男
下 克子	今村哲土虹		

要旨：いわゆる食道乳頭腫は過形成性の扁平上皮が乳頭状増殖を示す腫瘍類似病変であり、真の腫瘍は稀とされている。近年その報告例は増加しており、自験例について内視鏡的および病理組織学的に検討し、食道乳頭腫の臨床的意義について再検討を試みた。過去4年間に当院にて食道乳頭腫23例、27病巣を経験した。性比は男：女=12：11であり、平均年齢は50.3歳であった。単発例は21例、多発例は2例であった。病巣部位は中部食道15病巣(55.5%)、下部食道9病巣(33.3%)、SCJに3病巣(11.1%)を認め、中部食道に最も多かった。大きさは5mm未満のものが17病巣(59.2%)と半数以上を占めた。色調は白色調のものが多かった。肉眼形態について2型に分類すると、分葉型は6病巣(22.2%)、非分葉型が21病巣(77.7%)と多かった。背景病変としては逆流性食道炎15病巣、食道裂孔ヘルニア14病巣、萎縮性胃炎7病巣であった。発生要因との関連で抗human papilloma virus (HPV)抗体を用いた免疫染色法にて4病巣に核濃染像を認めた。食道胃接合部および下部食道乳頭腫には逆流性食道炎の合併が多く、関連性が考えられた。臨床的には生検により診断を確定し内視鏡的切除を考慮すべきとする考えもあるが、基本的には良性腫瘍様病変であり、大きさや形態の変化に注意し定期的な経過観察で十分と考える。

(Key 呼Vo叫 li) S(U印) Otto Pa. il如 211 血m印 papilloma 唱tr us, n如

主題
研究

食道扁平乳頭腫の臨床病理学的・免疫組織
化学的検索

20年経って大学病院
で100を超えた！

太田 敦子¹⁾ 岩下 明德 原岡 誠司
池田 圭祐 大重要 人 田邊 寛
西俣 伸亮

要旨 食道扁平乳頭腫 151 症例 156 病変を対象として臨床病理学および免疫組織化学的立場から検討した。平均年齢は 60.5 歳，男女比は 1:1.4 でやや女性に多く，中部食道に好発した (51.9%)。形態学的に外方へ向かって増殖する exophytic type (75.0%)，内方への増殖を示す endophytic type (23.1%)，スパイク状の尖った上皮を呈する spiked type (1.9%) の 3 型に分けられ，各群の koilocytosis, parakeratosis, 炎症細胞浸潤の程度および Ki-67 labeling index (L.I.) には明確な差を認めなかった。Ki-67 L.I. は，上部食道 (25.6 ± 9.6%) に比し下部食道 (34.6 ± 14.6%) に発生したもので，また炎症細胞浸潤の程度が高度なもので有意に高かった。抗 human papillomavirus (HPV) 抗体陽性細胞は 22 病変 (14.1%) に認められた。以上より，食道扁平乳頭腫には炎症細胞浸潤による上皮の反応性増殖と HPV 感染による増殖が存在することが示唆された。全例において上皮に明らかな異型はなく悪性所見も認めなかったが，HPV には癌化に関与するタイプも存在し，少なくとも経過観察は必要と考えられた。

Key words: 食道扁平乳頭腫 食道良性腫瘍 ヒト乳頭腫ウイルス (human papillomavirus) 食道炎 免疫組織化学

さあ、見返してごらん。
コツ5:タイトルが‘ぴったり’来ているか？

食道・胃接合部に発生した
食道パピローマの1例

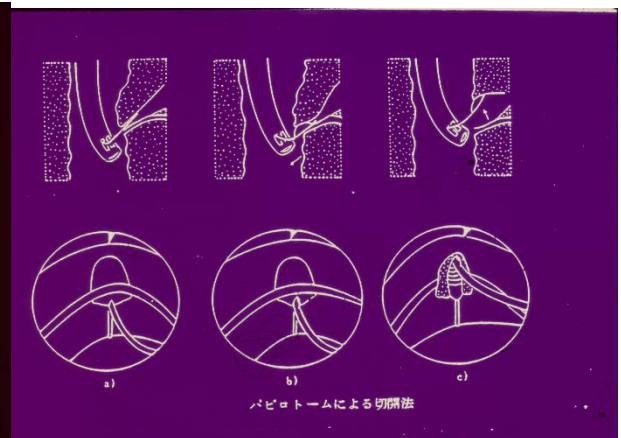
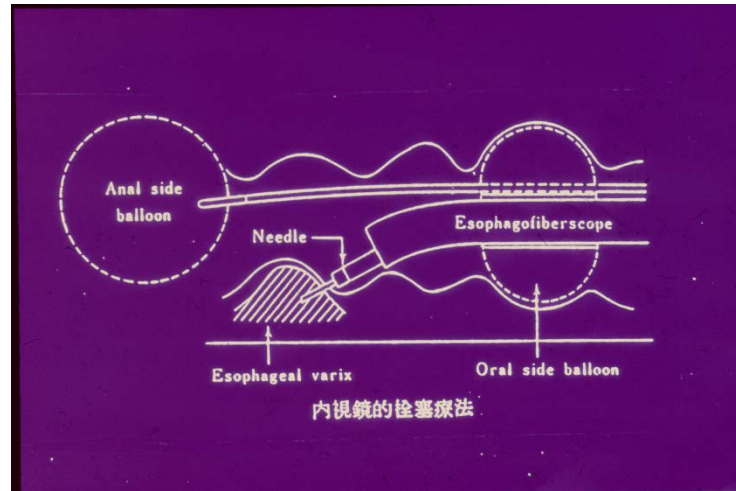
小林英司1)、本間正一郎1)
植木淳一2)、桑原 恒3)

- 1)新潟県立六日町病院外科
- 2)新潟大学第三内科
- 3)桑原医院

1988年(昭和63年)の症例:
「患者は教科書」以上だ！！

そこからさらに学んだこと！

コツ6：治療用内視鏡手技



そこから君らは何を学ぶ？

コツ7:内視鏡的組織切除を学ぶ

(1) ポリペクトミー

(2) 内視鏡的粘膜切除術(EMR)

(3) 内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)